

「好きな教科と嫌いな教科」

### 作文例①

「一段落目」好きな教科と嫌いな教科を簡潔に示す。

(例)

私の好きな教科は数学と社会の歴史です。嫌いな教科は国語と技術・家庭科などの副教科です。

「二段落目」好きな教科についての説明

(例)

数学がなぜ好きかというと、ただ一つの答えが論理的にはつきりと出てくるからです。数学では、基本的な計算の知識や公式、文章題の式の立て方などを覚えれば、あとは自分の頭の回転力が試されるだけで、あまりたくさんのことを覚える必要がありません。ゲームに限りなく近い教科だと思います。数学の嫌いな人は、基本的な知識さえ覚えようとしなくて、面倒くさがり屋ばかりな気がします。また、逆に、理科みたいにかくさんのことを覚えるのが好きな人もいますが、そちらも私には理解できません。もう一つの好きな教科である歴史ですが、こちらははつきり言って学校の授業は眠たくなるだけで嫌いです。でも、歴史漫画や小説がとても好きな私にとって、歴史のテストで九十点以上をとるのは、造作もないことです。歴史の本を読んで、歴史上の事実を知ると、この世界や人間のことがよくわかってきます。私はまだまだ勉強が足りないと思うので、もっとたくさんの歴史の本を読んでいきたいと思えます。ちなみに、地理は覚えることが多いので、あまり好きではありません。

「三段落目」嫌いな教科についての説明

(例)

次に嫌いな教科についてですが、国語は数学と違って、読解問題の答えがなんだかあやふやな感じがするので、好きになれません。本は好きな方で、国語の成績もそんなに悪くはないのですが、テストで時々とてもひどい点を取ることがあります。そういう時は、答え合わせをしても、なんで自分の答えが間違っているのか最後まで理解できません。特に、小説や詩の読解問題でそういうことが多いです。だいたい小説や詩なんて、読む方がどう感じようが、読者の勝手だと思います。百人いたら百通りの感じ方があるはずなのに、「この詩の特色として正しいものを選び」みたいな問題の存在がなんで許されるのか、理解に苦しみます。技術や家庭科に関しては、「実際の生活に必要な学科」などという人もいますが、あんなの家でお父さんやお母さんに教えてもらえば済むことだと思うので、やる意味が分かりません。私は結構料理はできる方で、カレーライスも肉ジャガも作れます。だけど、家庭科のテスト勉強を全くしないので、成績は悪いです。納得できません。学校の技術や家庭科の授業でちよつとやった程度では、実際に生活で必要になる力なんて身に着けられないと思います。よつて、技術も家庭科も、教科として廃止するべきだと思います。

「四段落目」結論・まとめ

(例) これからも、好きな教科はやっぱ好きだし、嫌いな教科はやっぱ嫌いなままだと思えますが、それが私の個性なので、嫌いな教科を無理して好きになるつもりはありません。

## 作文例②

「一段落目」好きな教科と嫌いな教科を簡潔に示す。

(例)

私の好きな教科は国語と技術・家庭科などの副教科です。嫌いな教科は数学と社会の歴史です。

「二段落目」好きな教科についての説明

(例)

国語がなぜ好きかというと、たいして読書なんかしないのに、私には読解問題がゲーム感覚で解けて、読書好きの子よりもテストでいい点を取れるからです。私のクラスに、「国語の読解問題は答えが一通りとは限らないはずだ」、みたいなことを負け惜しみで言い張る人がいるのですが、あらかじめ一つしか答えが決められていないことを前提に、その答えを推理していくのが読解問題の楽しさだと思います。それに、筆者の言いたいことは一つしかないはずで、いくつも解釈が許されてしまったら、言葉なんか通じなくなってしまうと思います。文章に書かれていることをしっかり読み取って、論理的にただ一つしかない筆者の伝えたいことを知る力は、言葉を使って生きている人間にとって、一番大切なことだと思います。技術や家庭科が好きなのも、人間として生きていくために、実際に必要となることを教えてくれるからです。英語などは、中学校から大学まで学校で勉強していい成績をとっていても、実際に留学をしたりして生活の中で使わないと身に着かないそうです。人間は、生活に密着した知識でないと、本当に役に立つ道具にすることができないのだと思います。学校で教えてくれる教科の中で、技術と家庭科ほど、私たちの実生活に役に立つ教科はありません。私は、中学校ではもともと技術と家庭科の時間を増やしてほしいと思います。

「三段落目」嫌いな教科についての説明

(例)

次に嫌いな教科についてですが、数学は国語と違って、将来生きていくのに役に立たない知識ばかり扱っている気がします。私の父は自分で作った会社の社長を務めています。中学生の頃から数学が嫌いでした。その父がよく言うのが、「算数は絶対に役に立つ。でも、方程式ってポイントに使わないんだよね」という言葉です。私も、図形の証明問題とか、理系の道に進む人でなければ絶対に必要ないと思います。正多面体の数とか覚えて何に役立つのか、全く理解に苦しみます。それでも、「数学は役に立たないけど、学歴は役に立つ。」という信念を持っているので、それなりに勉強して、まあまあ成績はとっています。同様に、歴史のテスト勉強もしっかりやっています。でも、好きにはなれません。好きになれないというよ

り、教科書にある歴史の知識が信用できないといった方が正しいかもしれませんが。なぜなら、歴史の本は結構読む方だからです。最近読んだ本に、「聖徳太子は実際にはいなかった。冠位十二階の制度も、十七条の憲法も、蘇我馬子たちが行った改革をモデルにした架空のもの。蘇我氏を倒した政権を正当化するために、聖徳太子という皇族がすばらしい政治を行った」という話があとから作られただけ。」といったことが書いてありました。他の本には、「歴史は百年後には書き変えられていて、今事実だと信じられていることの多くが否定されている」とありました。だとしたら、教科書に書いてあることってなにさ、と思ってしまう。

「四段落目」 結論・まとめ

(例)

一応これが、今の私の好きな教科と嫌いな教科ですが、この先ずつと好き嫌いが変わらな  
いなんてことはないと思います。人間なので、今嫌いな教科が好きになり、好きな教科が嫌い  
になることだってあるでしょう。

## 「私と日本語」

### 作文例①

「一段落目」自分にとって日本語はどんな存在か、簡潔に示す。

(例)

日本語が自分にとってどんな存在かなんて、普段の生活の中で考えることはない。でも、外国で、外国人の中にいるとよく分かる。それは、「僕が日本人である根拠」だ。

「二段落目」一段落目に提示したことについての説明。

(例)

もちろん、「日本人である根拠」といったら、普通は国籍というものになるんだろう。でも、いくら国籍が日本だからといって、外国の言葉を話し、日本語が話せなかったら、その人は周りから日本人だと思われたいような気がする。自分でも、自分のことを日本人だと考えることはできないんじゃないだろうか。逆に、外国籍の人でも、その人が普通にペラペラと日本語の話し言葉を話していたら、国籍を聞かない限り、僕はその人を日本人だと思うだろう。いや、外国籍だと聞かされても、やっぱり日本人、少なくとも日本民族ではあるんじゃないかと考える。僕には台湾人と日本人のハーフの友人が何人かいるが、日本語を話している彼らは、やはり日本人にしか見えない。そして、僕も、日本語を話しているからこそ日本人なんだと思う。

「三段落目」具体的な例や体験を挙げながら、意見を展開する

(例)

それぞれの国には、それぞれの国民性とか民族性とか言われるものがある。それは、簡単に言えば文化の違いというやつで区別されるんだろう。文化の違いは、歴史や地理の違いによつて異なるのだろうが、それ以上に言葉の違いが大きな文化の違いを生んでいると思う。なぜなら、人間は言葉を使って考えるし、言葉を使って人とコミュニケーションをとるからだ。

僕は小学校の時から台湾に住んでいて、中国語と英語を少し勉強してきたので、それらの言葉と比べた日本語の特徴が少し分かる。僕は今「僕」と自分のことを指しているが、友だちと話す時は「俺」を使っている。僕の父は、家では自分のことを「お父さん」と言っているが、外では「私」と言っている。もし中国語なら、僕も父も自分を「我」と言うし、英語なら「I」と言う。とてもシンプルだ。日本語の特徴を他にあげると、敬語の多さがあげられる。「です」「ます」だけでなく、尊敬語や謙譲語というのがあり、同じ「見る」でも、尊敬語なら「ご覧になる」、謙譲語なら「拝見する」と言う。といっても、僕も敬語はあまり使えていないので、偉そうなことは言えないのだが、少なくとも中国人やアメリカ人よりは、仲間内の言葉と外向きの言葉の区別を、知らず知らず気にして使っていると思う。内向きの言葉と外向きの言葉が違ふというのは、中国人やアメリカ人と比べた日本人のキャラクターに、大きな特徴を持たせていると思う。他にも日本語は、英語や中国語と違って、動詞が文の最後の方に来るとか、擬音語や擬態語が多いとか、平仮名・片仮名・漢字という三種類の文字を使いこなさなければならぬといった特徴がある。こういう特徴は、日本人の性格や考え方にも特徴を持た

せていると思う。

「四段落目」 結論・まとめ

(例)

日本語を使っているからこそ、僕の性格や考え方は日本的になっていく。日本語は、僕にとって日本語は、僕が日本人になるためのDNAみたいなものじゃないだろうか。

## 作文例②

「一段落目」自分にとって日本語はどんな存在か、簡潔に示す。

(例)

私にとって日本語は、日本人とコミュニケーションをとったり、日本語の本や漫画やドラマを見たりするために使う道具だ。

「二段落目」一段落目に提示したことについての説明。

(例)

私は日本人の父と台湾人の母との間に生まれたハーフだ。子供の時から日本語と中国語という二つの言葉を覚え、使ってきた。小学校の中学年ぐらいまでは台湾の学校に通い、その後は現在まで日本人学校に通っている。一応どちらの言葉もネイティブとして使うことができていると思う。でも、中国語を話すからといって私は台湾人であるわけではなく、日本語を話すからといって日本人であるわけでもない。中国語は台湾人とコミュニケーションをとり、中国語を聞き取ったり読みとったりするための道具だし、日本語も、日本人と話し、日本語を読み聞きするための道具だ。どちらの道具も、持っていて本当に便利だと思うし、これを与えてくれた父と母に感謝している。二つの言葉が使えるということは、一つの言葉しか使えない人の二倍、広い世界を持っているような気がする。

「三段落目」具体的な例や体験を挙げながら、意見を展開する

(例)

日本語を話せることが、日本人である証明になると言った人がいる。が、私は違うと思う。英語は世界中で使われているが、英語を使っている人がみんなアメリカ人やイギリス人、またはカナダ人やオーストラリア人なのかというと、もちろんそうではない。日本人にも英語がペラペラな人はたくさんいる。台湾人にもたくさんいる。英語が話せても、日本人がイギリス人になれるわけじゃない。台湾にはアメリカなどに移民する人が結構いるようだが、英語が話せる人がみんな移民するわけではない。日本語だって同じだ。世界中のたくさんの人が日本語を勉強して、日本人と日本語でコミュニケーションできたならそれは素敵なことだと思うが、日本語を話せるようになったからといって、その人たちが日本人になりたいと思うわけではないと思う。日本語の話せたからといって、アメリカ人はやっぱりアメリカ人だし、フランス人はフランス人、ドイツ人はドイツ人、台湾人は台湾人だ。

では、日本語と中国語が話せ、日本人と台湾人のハーフである私は、いったい何人なのだろうか。父と母は、私は日本人であり、台湾人であるという。私もそう思っている。でも同時に、

私は日本人でも台湾人でもなく、私なんだと思う。そして、それで困ることはない。私は日本語が好きだし、中国語も好きだ。実のところは、好きなテレビや音楽や漫画は日本のものばかりだし、最近ほとんど日本人の友だちとばかり付き合っていて、私の中では日本語の比重が大きくなっている。だが、今生活しているのは、台湾であり、やはり毎日中国語は使う。どちらが好きかなんて選べないし、選ぶ必要もない。言葉はただの道具なのだから。

「四段落目」 結論・まとめ

(例)

私にとって日本語も中国語も、私の世界を二倍にしてくれているとても大事な、そして、ただの道具である。私は今、私の世界を更に広げられるように、英語という道具もマスターしたいと思っている。

「周りのために自分ができる」と①

「一段落目」今までに人のために何かをしようと思ったこと、実際にしたこと示す。

(例)

周りの人たちのために何かしようと思うことなど、今までの私の生活の中ではほとんどなかったと思います。学校の委員会活動や、家の手伝いでさえ煩わしいと思う方なので、進んで知らない人のために何かをすることなんてことはめったにありません。でも、こんな私が、昨年の大震災の時には、自分も何かをしたい、しなくちゃいけないと思ったのでした。

「二段落目」一段落目に提示したことについての説明。

(例)

大きな津波に流されていく人や車や建物。町全体が海にのまれていく映像。その後の多くのボランティアの人たちの献身的な活動。台湾を含めた海外からのたくさんの方の支援。テレビやインターネットでそうしたニュースに接する度に、私の中にも少なからずこみ上げてくるものがありました。特に福島原発で、被爆の危険に身をさらしながら、放水作業に従事している人たちのことなどを話に聞くと、鼻の奥がつんとして、涙が出てしまったこともありました。そして、自分も何かしなくちゃいけないと真剣に思い、できることを探してみました。

「三段落目」具体的な例や体験を挙げながら、意見を展開する

(例)

ところが、そうやって熱い思いに突き動かされても、実際に私にできたことといえば、自分の貯金の一部を募金箱に入れることぐらいでした。三千元は、私のようなただの中学生にとっては、正直なところ結構高い額です。実際のところ、お金を入れた時は、我ながら頑張るなど思い、少しは役に立てたと思えることができたのです。でも、それは自己満足でしかなかったと思います。何かしなくちゃいけないと思う気持ちの穴をとりあえず埋めてはみたものの、しばらくして、セレブと呼ばれる人たちが個人で何千何億の義援金を寄付したというニュースを見たら、途端になんだかがっかりしてしまった自分がいたからです。そんな人たちにお金の額で勝てるわけもないのに、気持ちには自分の圧倒的な小ささを突き付けられて、なんだかつまらなくなってしまうのです。困っている人たちがいて、その人たちのために何かをしなきゃいけないと思って募金をしたはずなのに、自分の果たす役割がとても小さいものだと気づくと、いやになってしまい、そんな風にいやになってしまった自分が更にいやになってしまいました。

「四段落目」結論・まとめ

(例)

そんな経験があつて、私は一つ学ぶことが出来ました。それは、私にも他の人のために何かをしたいと思う時があるということであり、でもその気持ちは少し偽善的で、自分が目だつたり評価されたりしないと、何をしても満足することはできないということです。人のために何かをすることは大切なことだと思います。しかし、人間は、誰かがそれを評価してくれないと、喜んで他人のために動くことはできないのだと思います。

「周りのために自分ができる」と②

「一段落目」人のために何かをすること、について思うこと

(例)

「人間は、誰かの役に立っているという実感を持つてなければ、決して幸せにはなれないよ。」僕の好きなライトノベルにあったセリフだ。「ほしいものは何ですか」と尋ねられると、格好つけて「金がほしい」と言ってみたりする人だって、実際には、恥ずかしいぐらい、誰かの役に立ちたいと思っただけだったりする。僕も、人前ではとても言えないが、やっぱり誰かの役に立ちたいと思っってしまう、ごく平凡な人間だ。

「二段落目」一段落目に提示したことについての説明。

(例)

誰かの役に立っているという実感、もちろんその誰かさんに感謝されたり評価されたりしたときに、最も強く実感できるものだと思う。でも、右のセリフの主のその登場人物はこうも言っている。「相手に評価されるかどうかなんて、結構どうでもいいことだ。自己満足でいい。大切にしている人の役に立っているという自己満足を餌にすれば、それだけで人間は結構生きていけるもんだ。」その通りだとは思わない。でも、大人になったら、役に立っているという思い込みでもなければ、どんな仕事もやってられなくなるような気はする。

「三段落目」具体的な例や体験を挙げながら、意見を展開する

(例)

例えば犬の世話。犬は感謝なんかしてくれない。でも、自分が散歩に連れて行ってやらなきゃ、自分が体を洗ってあげなきゃ、こいつは病気になるってしまう。そう思うから、世話ができる。例えば僕の父。家族の中で父はしよっちゅうのけ者になる。中年太りだし、水虫があるし、口が臭い。だからみんなに馬鹿にされる。すぐに怒る。だからみんなにうざいと思われる。一人センスがずれている。だからみんなに無視される。でも、父は毎日働きに行き、僕たち家族を食わせている。何の感謝もされず、家族のためにお金を入れて当然と思われ、もし失業などしようものならきつと僕らに軽蔑される。時々、家族なんか捨ててもっと評価してくれる人と暮らしたら、父はどんなに幸せだろうと思うことがある。だけど、父さんは僕らを捨てないだろう。父さんがいなくなれば、僕らが困ることを知っているからだ。自分の存在が役に立っている、自分がいなくなればきつと困る、そう思える相手が周りにいることは、自分がいることに意義を感じさせてくれる。それが自己満足であったとしてもだ。

「四段落目」結論・まとめ

(例)

僕は周りのために何ができるだろう。犬の世話、家の手伝い、クラスの係活動。今のところ大したことは何もできていない。でも、家族や友だちの役に立ちたい。そういう本音はある。父のような稼ぎも、これといった能力もない僕が、周りのためにできることは、今のところ、僕のために何かをしてくれている人たちに感謝し、彼らに評価されていることを感じてもらうことかもしれない。とりあえず、父に感謝するところから始めてみよう。

「売れる商品を作るには」①

「一段落目」売れる商品を作るために必要だと思ふこと

(例)

売れる商品を作るために必要な物は何か。それは何といつても獨創性でしょう。誰も今まで思いつかなかつたような新しいアイデアが、現在までの大ヒット商品を生み出してきたのだと思います。

「二段落目」一段落目に提示したことについての説明。

(例)

もちろん、ただ獨創的ただけでは売れないと思います。会社にはマーケティングといって、消費者が今どのような商品やサービスを求めているのか調査する部門があるそうです。人々が求めているものとマッチしてなければ、どんなに獨創的であっても、奇妙で珍しいだけの商品になってしまうと思います。しかし、いくら需要があるからと言って、他の会社と同じものを作っているだけでは、競争には勝てません。同じ種類の商品であっても、他とは違う価値を持つていなければ、ヒット商品になるわけがありません。また、人々がすでに求めている商品を作っているだけでもダメだと思ひます。今まではなかつたようなもので、人々が潜在的には求めていても、思ひつゝことになつたような商品。そういうものが、大ヒット商品になるのではないのでしょうか。

「三段落目」具体的な例や体験を挙げながら、意見を展開する

(例)

そんなヒット商品の例として、僕が第一に挙げたい商品は、アップル社の「iPhone」です。アップル社はマッキントッシュを世に出した。パソコン界の老舗ですが、パソコンと音楽プレーヤーを結びつけた「iPod」を作り、一躍音楽端末業界のトップに躍り出ました。そして、その「iPod」と高機能携帯電話を結びつけて作り出したのが「iPhone」です。パソコンを作っていた会社が、音楽や携帯電話の世界も取り入れ、十年も前ならまだ未来の世界の夢の道具のように思われていたものを、現実の世界に生み出してしまったわけです。誰も考えないもの、考えたとしても本気で実現しようと思ひないものを、アップル社の「iPod」・「iPhone」は作り出しました。今までと同じことや、他の人がしているのと同じことをしていたら、「iPod」も「iPhone」もきつと生まれなかつたと思ひます。では、どうすれば彼のように獨創的な商品を作れるのでしょうか。たぶん、常識にとらわれないうで、なおかつ真剣に人々が求めそうなものを考え、地道にそれを作つていくことなんだと僕は思ひます。

「四段落目」結論・まとめ

(例)

登場するまでは誰も欲しいと思つていなかつたのに、登場した途端に多くの人たちがほしくてたまらなくなるような商品。そんな商品を、僕もいつか作つてみたいです。

「売れる商品を作るには」②

「一段落目」売れる商品はなぜ売れるのか

(例)

世の中には、多数の人がほしがってたまらなくなるような商品が時に生まれる。そういう商品はなぜ売れるのか。当然だけど、みんなが欲しがるからだ。では、どうしてみんなは欲しがるのか。それはたぶん、みんなが持っているからだ。

「二段落目」一段落目に提示したことについての説明。

(例)

ある商品が生まれる。今までなかったような商品で、便利だったり、綺麗だったり、美味しかったりして、魅了される人がいる。そうして、一部の人たちが購入する。本当にいい商品だったら、買った人たちがそれを知人に教え、同じように魅了されて買う人が増え、同じような口コミが広がっていく。こうしてヒット商品ができる。そこまではいい。でも、大ヒット商品と呼ばれる商品の場合、別の要素が加わる。その商品は今までなかったような商品で、なかった以上は、今までのたくさんの人たちが特に必要としていなかった商品だともいえる。そして、ヒットした後も、やはり必要としない人がたくさんいる。が、そのままでは大ヒットにはならない。大ヒット商品になるのは、必要としない人たちがまでもが、買ったくてたまらなくなる時だ。なぜそんなことが起こるのか。それは、たくさんの人が持っているものは、たとえ必要でなくても、持っていないとみじめに思えてきてしまうからだ。

「三段落目」具体的な例や体験を挙げながら、意見を展開する

(例)

今、iPhoneやXperiaなどのスマートフォンが大ヒット中だ。でも、私は必要としていない。欲しくもない。なくたって、全く困らない。だから買わない。じゃあ、スマートフォンを持っている人たちはどうだろう。スマートフォンを持っている私の友だちは、スマートフォンでゲームをしたり、ダウンロードした動画を見たり、写真やビデオを撮ったり、撮った写真やビデオをいじって遊んだり、Facebookをやったりしている。それって、そんなに楽しそうに見えない。たぶん、私の友だちにもiPhoneはそれほど必要とされていない。でも、友だちは盛んにiPhoneの購入を勧めてくる。正直なところ、ウザい。大したことに使えているわけでもないのに、バカだなど思う。それでも、その子に言われてスマートフォンが欲しくなり、買ってしまった子が何人かいる。そして、その子と同じようにスマートフォンをしょっちゅういじって下を見ている。やっぱり、大したことに使っていない。

「四段落目」結論・まとめ

(例)

大ヒット商品が生まれる訳には、いつも似たようなところがあると思う。つまり、その商品を本当は必要としない人たちにさえ買いたいと思わせてしまおう、少しばかりかばかしい集団心理だ。私は、これからも、できる限り要らないものは買わないようにしたいと思う。